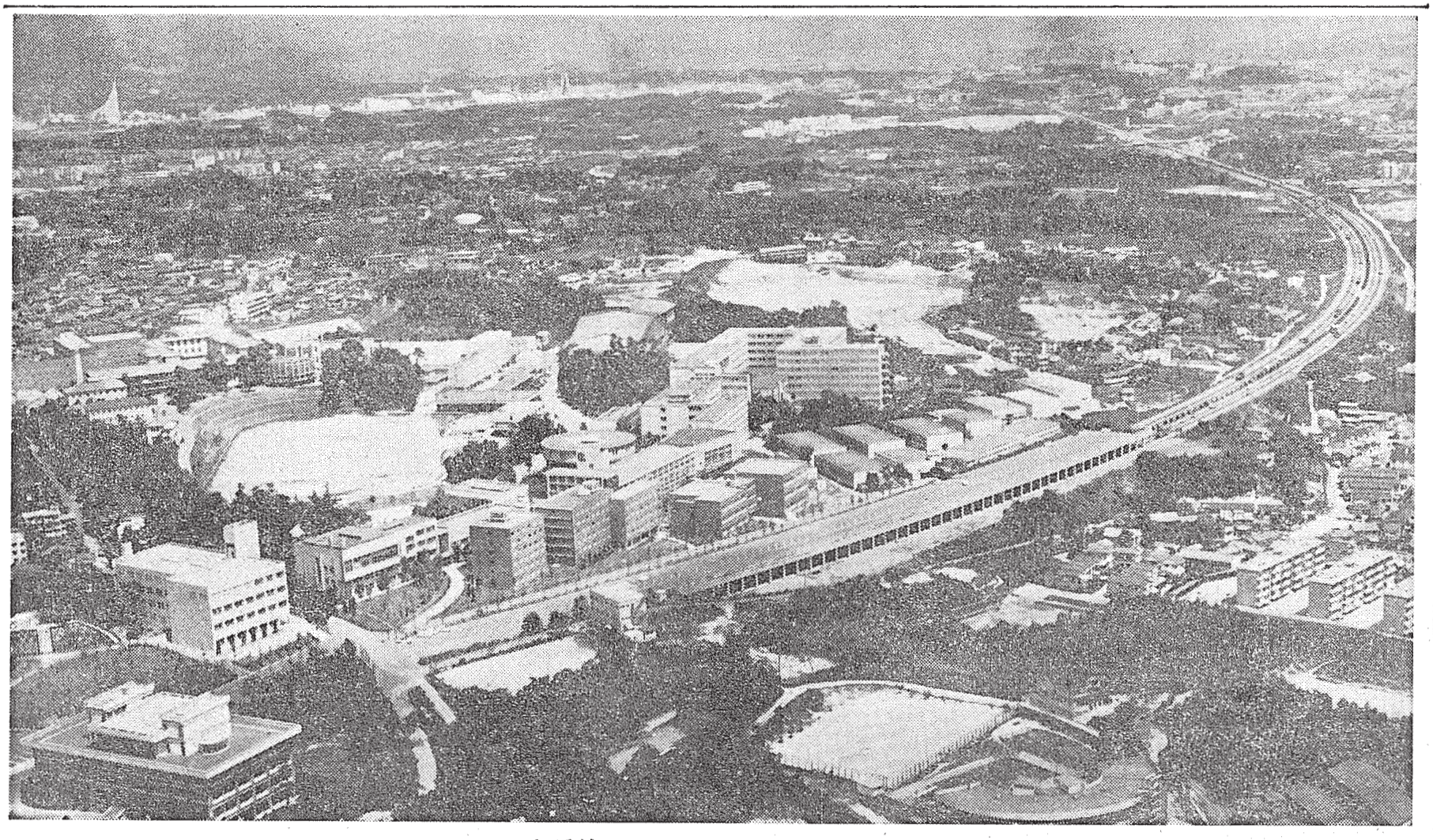
THE KANSAI UNIVERSITY NEWS

第15号
広報委員会発行

関西大学通信

大阪府吹田市山手町3丁目
関西大学広報委員会



新年を迎えて

学長　広瀬捨三

全学の皆さま、あけましてお めでとう存じます。皆さまはそれぞれ、新年に際して、新しい抱負をいだかれたことと存じます。大学も新学年ではありませんが、今後の進むべき方向を考えて見るのも無駄ではありますまい。全国的な大学紛争も一昨年秋より収拾がついてきたようで、本学でも、学園内の正常化と、改革案の作成ということで、私の学長代行の時代を過してまいりました。しからば今の時点において、この二つはどうでありましょうか。

正常化ということに関して、今なお一部分の学生の間ではありますが、何かと問題があるのは、遺憾なことです。何かのきっかけを拵えては、もちろんこれも外部から操られているのでありますが、ヘルメットをかぶり、マイクでがなりたて、学内をデモします。いずれも皆禁止事項です。千里山では全学的な学友会の組織もいまだ出来ず、昨秋は大学祭を機会に大同団結をするものと期待していましたが、全学的な団結を阻むことこそわれらの使命であると叫んで、遂に無力の大学構内で、完全武装の集団がわがもの顔に横行しました。しかも彼等は誠之館三号館に無断宿泊をして動きません。立看板は所かまわず大きなのを出して、来年の入学要項を取りに来た受験生やその父兄をして、関西大学はいまだ紛争が終っていないのか、こんな汚ない大学かと驚かしめて、入学願書も貰わずに帰る者が続出するという始末でした。

ここに昨年末本学は一大決意をして、立看板などの整備、誠之館使用規則の励行を断行しました。

本年は学内でヘルメットをかぶる者について遠慮なく規制します。ダンテは地獄の二者たちに対して「ただ見て過ぎよ」と激しい侮蔑の言葉を吐きました。私も彼等に対して同様の気持です。「教会では聖者と共に酒場では酒飲みと共に、地獄では獄卒と共に」と又ダンテはいっていますが「学園では学徒と共に」であって、なんといっても学内でのヘルメットをかぶった、しょぼたれた姿はいただけません。改革案については、今までより一歩進んだ学長選挙案がやっときまりまして、昨年九月これを暫定措置として、学長選挙が行なわれました。これはその意味において、世間の注目するところでありました。改革問題については、目下教学部長私案というものを出しておりますので新春より全学的にこれをもとにして、議論を進めていただくつもりです。

いずれにしましても、学内正常化が、すなわち学内の改革です。学内を無頼の徒に横行させて、なんの大学の改革ですか。今春より学内の秩序維持について、きびしい態度でのぞむと共に、学内教員の積極的な協力を期待します。

学内の正常化へ
厳しい態度で

一億七百九十六万八千円
私学補助金の交付内示

私学助成問題の重要性については「関西大学通信」第14号においてもとりあげられているが、このたび昭和四十五年度私立大学等経常費補助金総額約百三十二億円のうち七〇％の配分が決定し、本学には一億七百九十六万八千円の交付が日本私学振興財団より十一月三十日付で内示された。なお、四月～十二月分として七五％の八千九十七万円が昨年中に交付された。

この補助金は、私立大学などの教育研究条件を整備してその教育の充実向上を図るためのものであり、うち五〇％は専任教員給与費、五〇％が教育研究経常費に対する補助である。

趣向こらし花やかに
＝第二部学園祭ひらく＝
広瀬学長らも出席

十一月二十五日、天六学舎では、第二十三回学園祭の前夜祭が、実行委員長の開会宣言を口火として催された。翌二十六日から二十八日にかけて、各部それぞれが趣向をこらした出し物で、講演会、映画、演劇発表会、演奏会、体育会各部の試合、展示、模擬店等、天六学舎はにぎやかなお祭りの場になった。二十九日は、応援団の乱舞のあと、学長らの挨拶があり、表彰のあと学歌を斉唱してキャンドル・サービスが行なわれ、こうして二部学園祭行事は無事に終了した。＝写真は茶道部のお点前風景

一部大学祭のほとんど中止

十二月四日から七日にわたる期間、一部大学祭の開催が予定され、ベルビル祭・紫紺祭・文化祭の三つがそれぞれ独自に行なわれるべく準備が進められていた。大学当局は、全学休講の措置をとり、資金的補助も予定して、その成功を期待したが、困難な事態が発生したため、紫紺祭・文化祭の行事のほとんどが中止された。しかし、全期間を通じ、比較的平穏裡に終った。

これとは別に、同じ期間、第九回工学祭が開催されたが、第四学舎を中心に、特別講義や工学展示など、賑やかに行なわれた。

教学部長代理に田中教授

田中英三文学部教授が十二月一日付で教学部長代理として発令された。

千里眼

◇一九七一年は、日本にとって、内政・外交ともに多難の問題をかかえている。関大においても、多くの問題に対処して行かねばならないであろうし、いわゆる「大学改革」を含めて、検討されなければならないことが多い。

大学の改革のためには、学問の府としての大学が、どのようにあるのが、教育と研究に最も適切であるか、という見地から考えていかねばならない。大学の改革は、いわゆる「大学改革」として大きくふりかざして、一時的にのみ終ってよいものではなく、平常的にも検討が加えられていくべき問題である。そして世俗的ムードや風潮に左右されることなく、花火の如く、一時的なものに終ることなく、大学人としての理念をもって、われわれは常に大学の前進を忘れてはならない。

大学がいかにあるべきかの具体的な制度・方策について、各人の意見を調整することの難しさは、十分察知されるところであるが、われわれは忍耐強くこれに取組み、十分な検討・研究の上に立って、着実に大学が前進するよう、努力しなければならない。

◇新年を迎え、最終学年の学生諸君は、まもなく大学を卒業し、実社会に出られる日も近い。それぞれがいろいろの目標・期待や不安をもっておられようが、本当に自由に勉学できるのは学生時代であり、悔のない学生時代の最後をかざってほしい。（H）

1971年の展望

一九七〇年に入ってさまざまの立場から、七〇年代の展望ということがジャーナリズムを賑わせた。

高度の経済成長の上に夢見られたバラ色の未来論は、いつしか自然破壊とか公害問題といった灰色のヴィジョンに取って替られて、現在にまでおよんでいる。

この問題は、単に政治、産業、社会の体制にかかわるだけのものではなく、われわれ近代的人間のあり方それ自身に対しても、根源的な問いを投げかけるものである。

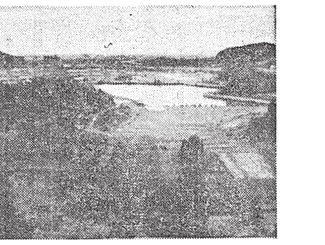
しかし、近代技術社会の発展が人間の生存そのものの未来像とは、切り離し得ないものであろう。後って、これは一時のジャーナリスティックな興味で取り扱われるべきものでなく、各人が自分の問題として受けとめ根本的に反省さるべきであろう。

そこで、本号ではわれわれの直面する数多くの難問から、特に重要と思われる三つのテーマ、古都・自然環境の保存、公害問題、コンピューターについて、それぞれのエクスパートの先生方から、興味ある原稿をお寄せいただいた。

七一年の始めにあたって来るべき年を考えられるのに、一つの手懸りともなれば幸いである。

古都・自然環境

古都保存について


保存（右）と開発（左）の境界線上にたつ飛鳥（毎日新聞社提供）

文学部教授――横田健一

古への人にわれあれやさなみのふるさとみやこを見れば悲しき

さなみの国ゝ御神のうらさびて荒れたるみやこ見れば悲しも

これは高市古人（一説旅人）が近江の旧都かなしんで作った歌である。（万葉集巻一）古都という言葉を聞いただけで、私はこれらの歌をおもう。壬申の乱で荒れはてた都のあと立って、ひろびろとした穏雲の美しい青空に見いっての感慨である。昔は古都を荒廃せしめるものは、第一に戦争であった。

さざなみや志賀の都は荒れにしをむかしながらの山桜かな

これは源平の戦におおむく忠度のよび歌である。（千載集）

これも私のすきな歌である。都は荒れても年々歳々山桜はかわらず美しく咲く。いにしえの人の心を思いつつ、ひとり山桜を眺めるのである。（万葉集）

崩れゆく文化財・遺跡

みんなの協力で守ろう

文学部教授――横田健一

「美しく咲く、いにしえびとの心の俳句がうまれて、花も木も緑の枯れようとしている時代になった。湖の水はかれ、藻が異常繁殖し、水道の水が濁る時代となった。

昨年一月末、吉野の後醍、醐化は大問題となり、とくに飛鳥はそ

飛鳥はかりではない。鎌倉では、地区の話い一等地を宅地公開発を主張する市長候補者が落選し、開発反対・古文化保全を叫ぶ人が当選した。一昔前には反対の現象をしていた。鎌倉は訪れてみると、今や人が満ち、車がいっぱい、街路を埋め、閑寂の趣は急速に消えようとしている。

奈良では東の接近が、西の接近が、正倉院の倉の中に侵入、宝物に悪影響が出ておそれがある。多くの同様なことが多い。政府・文化庁は、今の政府に

ちた。地震の話い一等地を宅地公開発を主張する市長候補者が落選し、開発反対・古文化保全を叫ぶ人が当選した。一昔前には反対の現象をしていた。鎌倉は訪れてみると、今や人が満ち、車がいっぱい、街路を埋め、閑寂の趣は急速に消えようとしている。

奈良では東の接近が、西の接近が、正倉院の倉の中に侵入、宝物に悪影響が出ておそれがある。多くの同様なことが多い。政府・文化庁は、今の政府に

しまう。ところが日本の古文化財は木造建築が多く、地震に弱い。ことに地上に露出している遺跡は地中の経済第一主義がまわり過ぎ。

どうして古都が保存しにくいのか、保存しにくい。最近を路線東京の拡張の交付がおくれたのに、パンを地上補助金の交付がおくれて困っている。

なぜか、最大の狙いが経済の急成長への集中にあるからだ。高度成長、人口の急激な都市への近郊への集中にあるからだ。高度成長、道路の発展、新幹線の大工場の建設、飛行場の造成など、人口集中で家が多くなっている。その急速さは、アッという間に、地面が大きに掘り返されるのである。

作用ひろきおこし、そのための初の成果が顕潤しなければならない。

なぜか、最大の狙いが経済の急成長への集中にあるからだ。高度成長、人口の急激な都市への近郊への集中にあるからだ。高度成長、道路の発展、新幹線の大工場の建設、飛行場の造成など、人口集中で家が多くなっている。その急速さは、アッという間に、地面が大きに掘り返されるのである。

作用ひろきおこし、そのための初の成果が顕潤しなければならない。

社会間題となっている公害の主要な原因は、六〇年代以降の高度成長の高度の集積と集中、独占支配の強化による経済の高度成長である。

そのなかでうち出された国土開発の構想――本州、九州地帯構想、ついで新産開発構想――は過密地帯における新土建業の主題。

公害

公害問題展望

工学部教授――庄司　光

環境資源は個人が所有できないが、まったくまったくも不完全にしか所有できない自然の価値のある財産である。環境資源は市場での交換の対象にはならない。大気、水、生態系および空間のある程度のこのような環境資源の破壊がおこり、人の健康、生命が損傷される。技術革新に伴う都市化、工業化と燃料消費量の大幅な増加、好まくない生産の副産物は外部不経済をもたらした。

近年、産業廃棄物量は利用可能な自然環境の同化容量を越え、水、空気などの環境を保護することが難しくなった。過去においては環境汚染をコントロールするとき、汚染未然はかつ体の廃棄物を処理し、または廃棄物を処理するのに

三冊の本

ルソー

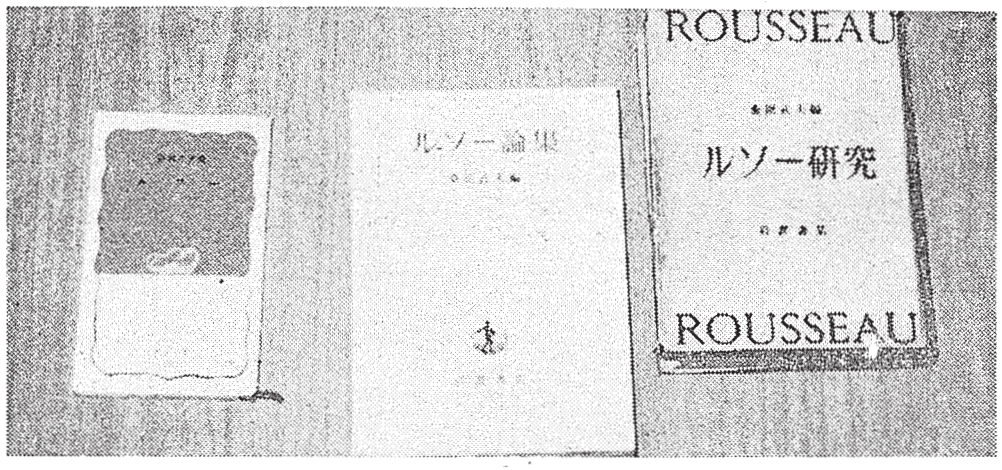
経済学部助教授　松岡　保

「学問、文学、芸術は、政府ほど専制的ではありませんが、おそらく一層強力に、人間を縛っている鉄鎖を花飾りでかざり人生の目的と思われる人間の生まれながらの自由の感情をおし殺し、人間に隷従状態を好ませるようにし、いわゆる文化人を作りあげました」この言葉を発したのは、一七五〇年、当時三八歳のJ・J・ルソーであった。今なお、というよりはまさに昨今、この言葉は人をして考えこませるものがあるが、そのルソーについては、桑原武夫氏を中心とする共同研究の成果、三冊がある。

その第①は、二〇年前の『ルソー研究』（昭和二六年）であり、第②はルソー生誕二五〇年を記念した新書版の『ルソー』（昭和三七年）であり、第③が最近の『ルソー論集』（昭和四五年）であって、いずれも桑原武夫編、岩波書店刊である。

多方面からの共同研究

まず最初に注目すべきは、①がわが国での人文・社会科学における共同研究の先鞭をつけたものであり、その成果であることであろう。この共同研究の発足とその後の発展については、桑原武夫教授退官記念講演「人文科学における共同研究」（『展望』昭和四三年六月）に詳しいけれども、ルソーについての共同研究は、以後、④『フランス百科全書の研究』（昭和二九年）『フランス革命の研究』（昭和三四年）などを生みだして行った。すべて、多方面から問題を解明しようとした力作で、とくに④は、今なおこの分野での唯一のまとまった研究といってよい。



それゆえ、①は、①④⑤という系列での三部作の出発点でもあり、現在では珍しくなったわが国での共同研究――その当否、功罪――にふれるさい、逸することのできない地位を占めている。内容的にも、「人間ルソー」からはじまって、「哲学」、「宗教・倫理思想」から「平和思想」、「農民史におけるルソー」、「文学」「教育」におよぶ各論稿は、便利な「ルソー全著作要約」ともども、なお生命を保っており、近年、部分的改訂にとどめた第二版が出されている。（昭和四三年）

問題関心の変化
――『学問芸術論』への評価の高まり――

しかし、同時に、①②③という形で三部作をながめたさい、より興味をひくのは、その間にやはり研究者のルソーにたいする問題関心が変化している点であろう。①は、「合理主義者」ルソーをうかびあらせたのが功績と評された記憶があるが、たしかに、矛盾した性格を認めながらも全体としては啓蒙思想家の一人としてのルソーの感が強く、そうしたものとして肯定的にとらえられているように思われる。冒頭にかかげた文章を含む『学問芸術論』は正面から扱われることなく、その意味で、『人間不平等起源論』『エミール』を通じて流れるルソーの文明、文化批判の問題については弱かったといえば、誤読であろうか。というのも、わたくしは、②においてはじめて、その重大性を教えられたからである。

すなわち、②においては、歴史を人間の「自己疎外」の展開過程とし、最後、「専制主義のアナーキー」の前に否定的な意味での「自然状態」の再現をみるというかれの歴史認識が、ルソー把握の軸におかれ、その出発点としての『学問芸術論』に光があてられている。これは、やはり問題関心の変化であろう。フィデル・カストロとルソーとの結びつきも、本書においては成程と納得的で、小著とはいえ、②はルソー入門の好著である。

『ルソー論集』の段階

もっとも、一昨年くらいまでは、冒頭の文章を説明するのに、「学問」＝「受験勉強」とおきかえて考えてもらわねばならなかった。（あたかも大学でのはそうでないかのように）幸いにも、現在は説明不要である。この変化、それは③の『ルソー論集』にも反映し、「ルソーの学問批判」が正面からのテーマになっているし、「ルソーにおける革命概念と革命思想」「ルソーとマルクス――革命のロジック」とならんでいる。「啓蒙」家ルソーから「革命思想」家ルソーへという感で、明らかに二〇年前とは落差がありそうだ。そして、ルソー自体の著書でいえば、『不平等起源論』、さらに『学問芸術論』と『エミール』へといったようにもいえそうである。

翻訳もそれを裏づけるかのように、後の二つの新訳が比較的最近に、岩波文庫と「世界の名著」（中央公論社）で出て、入手しやすくなった。ともに、学問、教育にかかわるものであることは示唆的である。「無知よりもなお一層軽蔑すべき、わけのわからない学問的戯言」を弄していないか、ルソーやその研究を読みながら、私は考えさせられる。

海外だより

南フランスから
――ポーの夏期大学

文学部専任講師　円尾　健

近くのルールド（巡礼地）にて（筆者）

一昨年夏、フランス政府の招待でフランスに渡ってから、一年たらずの滞在を終えて昨年春帰国したので、フランスだよりを書くようにとの依頼を受けた。

ただ、本題から少しずれるかも知れないが、今の私には「留学」とか「帰朝報告」といった耳なれたことばについて、出発以前のように簡単に考えることはできなくなっている。まず第一に、研究者としてふさわしい勉強をするにはまず三年、最低二年はどうしても必要で、一年やそこらでは――少なくとも最初の海外生活では――そこの生活になれ、見てまわるだけが精一杯で、むしろそれに徹する方がはるかに有意義だと考える。つぎに外国での印象ということについても、私は本に書いてあることや人から聞く話がいかにあてにならないかということを痛感して帰って来たのであった。

〝世界各国の学生で家族的なふん囲気〟

これらのことについてはまた別の機会にゆずるとして、いずれにしろ、これだけ活字、テレビ、ラジオが発達し、情報が氾濫していて外国についても何か知ってるような気がしている現代でも、結局は自分自身でたしかめる他はないようである。その意味で少なくとも外国の語学や文学、哲学、歴史等、その国の文化の研究にたずさわる人間にとって、そこの生活を経験することは――それもできるだけ若いうちに――義務であると同時に権利であると信じている。

前おきが長くなったが、ともあれ未知の国ですごしたこの一年ほどは貴重であり、充実した時間であった。

一口にフランスといっても広く、短い期間ではそのごく一部にしか触れることはできないが、ここでは最初の二ヵ月ほどを過した南フランス（ミディ）、とくにポーでの見聞を若干述べて見よう。パリなどはすでに、いわば定食コースとして多くの人が多くのことをしるしているし、それ以外のところはあまり日本人に知られてはいないようだから。

生まれてはじめて国外に出る期待と興奮で、まるではじめて遠足に出る小学生のように胸を躍らせながら一行とともに羽田を発ったのは七月十日、パリに着いたのはその翌日であった。その時の、なにか足が地についていないような、ふしぎな感触をなつかしく思い出す。店に入ろうと思ってもどうもその勇気がなく、どうしてよいか分らずその前をただ行ったり来たり、また通行く人がなにか別世界の人間のように思えてふしぎそうに見つめたりしていたのである。

一晩パリですごしたあと、次の朝オーステルリッツ駅から、スペインとの国境に近いポーに向った。ポーはピレネ山脈を近くにのぞむ風光明媚な保養地であるが、われわれはまずこの地での夏期大学に招かれたのである。（夏期大学といってもフランスのそれは日本のとはいささか性質を異にし、大学は原則として外国人の教師や学生に門戸を解放することになっている）

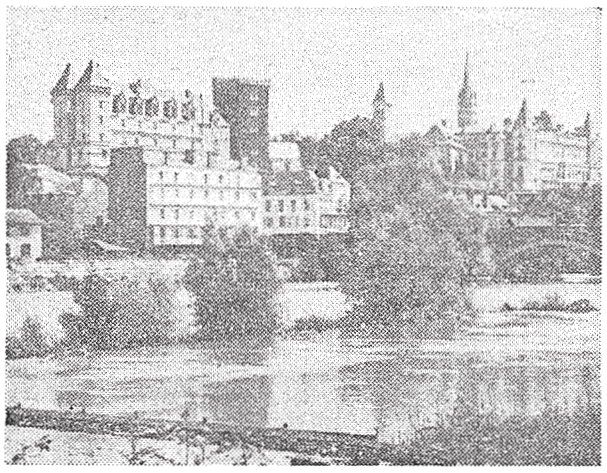
世界各国から――といってもやはりヨーロッパ諸国が多いが、その次にアメリカ人、トルコ人、アフリカ人、アジア人など――数百人の教師、学生が集って来るが、教師を除けばほとんど若い学生で、女性も多く、なかなかはなやかなふんい気である。期せずしてそれぞれのお国ぶりが出、その意味でもなかなか勉強になる。一口に夏期大学といっても大学や土地によっていろんなカラーがあり、このポーのそれは親しみやすい、家族的なふんい気が特色だということであった。その意味で、フランスの夏期大学に参加したいと考えている学生諸君に安心してすすめられるコースの一つであろう。

このポーという町は、もとはイギリスの植民地であったというが、あまり大きい建物はなく、全体に色彩の調和が取れていて、親しみやすい美しい町である。はじめて町に入った時は、何か絵本から抜け出したような感じがしたことをおぼえている。小都市にもかかわらず、東京や大阪でもお目にかかれないような立派な公園があり、町のところどころに広場がもうけてあって必ず花壇がついていて、ベンチで人が新聞を読んだりおしゃべりを楽しんだりしている。それはなにもポーだけにかぎらないけれど、はじめての町だけに印象が強く、日本の町のごたごたした狭くるしさと比較してだいぶ差があると思った。

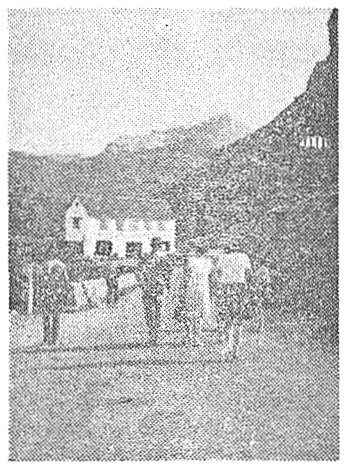
日本ではうだるような暑さのはずだが、こちらは日中は相当暑い（三十度前後）ものの、朝晩はかなり涼しく、曇った日には肌寒い日さえある。とにかくあのむし暑さがなく、それに下水道が完備しているせいだろう、蚤を明けはなしても蚊もおらずその点でも快適である。

ここは近世の名君として西洋史でも有名なアンリ四世（ナントの勅令）ゆかりの地で、お城が残っている。市民も、「われわれは〝アンリ四世の子孫〟である」と称してそれをほこりにしているように見受けられた。この点やはり日本のお国自慢と共通したものを見るようでおもしろいと思った。

ところで、フランス人は個人主義者として知られていて、私自身も行くまでは本などからそう思い込んでいた。事実、滞在中にもフランス人からそのことについて、フランス人の冷たさについて聞かされたし、パリで招待された家庭でも、「人が道で倒れていても無関心で通りすぎるのがフランス人だ」と教えられたこともある。しかし、この最初の地方都市で受けた暖かい歓迎はそれらの常識を完全に裏切るもので日本でも地方都市などで見られる心のこもったもてなしとは少しも違ってはいなかった。その後の経験から考えて見ると、たしかにフランス人にはそういった冷い面もあることはあるようだが、あまりその点を強調しすぎると、真のフランス人を見誤ることになろう。いずれにしろ本だけの知識や人の話だけで外国を判断するのは誤解を招きやすいどころか、危険でさえある。もっとも、外国で生活していても、ちょっと表面だけを見て性急で勝手な結論を引き出す日本人も多く、それも劣らず危険だということも同時につけ加えておかなくてはならないだろう。外国について語ることは、実は自己について語ることなのである。


ポーのアンリー四世の城

サヨナラパーティーでのスペインの女子学生


ピレネの峠にて

スペインとの国境に近いだけにスペインの若い学生が多かったが、全体として人なつっこく、宿舎の中学の校庭で夜おそくまでギターの伴奏などで歌に興じ、最後の学芸会ではすばらしいスペイン舞踊をひろうしてくれて、芸術的天分ではフランス人よりすぐれているのではないかとひそかに考えたりした。

この辺から地中海にかけて、南フランスはすばらしい土地である。他にいろいろ書きたいこともあるが後日に譲ることにしよう。

三上教授逝去

三上諦聴氏（本学文学部教授）は十二月四日午前九時四十三分、肝臓ガンのため、大津市民病院で逝去された。五十九歳。告別式は六日午後二時から大津市雄琴町八二九の自宅で行なわれた。

教授は大津市出身、南谷輔仁大文学院卒、北京師範大副教授、立命大教授を歴任後、本学に着任された。昭和二十六年四月専任講師、同五月助教授、昭和三十一年教授、昭和三十四年十月一日から三十五年九月三十一日まで文学部長代理をつとめられた。温厚篤実なお人柄で専攻は中国近代史。

《編集後記》

「関西大学通信」発足以来、足かけ三年、ここに七一年という新しい年を迎えて、「七一年の展望」というテーマの下に、学長の関大のあり方の展望を始め、各種の問題について、諸先生の御協力をいただいて、本号の編集を終えることになった。

広報委員会としても新しい展望の下に、次第に脱皮をめざして模索中である。各方面からの御助言、御忠告に対して御礼申し上げると共に、今後も宜しくお願い申し上げる次第である。